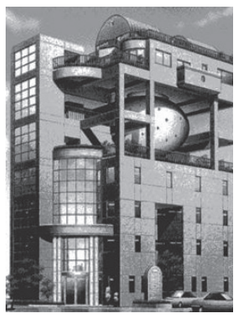
日本国民への提言 ㊱

たまごビル
院長 石垣 邦彦
〒581-0061
大阪府八尾市春日町1-4-4
電話072（991）3398
FAX072（991）4498
ホームページアドレス
http://www.tamagobl.com/



たまご理論で病気のしくみを考える

日本の国民一人ひとりが、自らの「からだ」の「しくみ」を生かすことで、日本を再生する

＊医療費の膨張する大きな原因は
① 高齢者数の増加
② 医療の高度化（新技術、薬、高度な検査機器の開発普及など）であり、
さらに少子高齢化に拍車がかかり、このままの医療では、明らかに公的医療保険制度は破綻すること。

＊さらに医療に介護、年金を合わせた社会保障給付費は、約111兆円（平成26年度は114・8兆円）であること。

＊財政審の試算では、この社会保障給付費は、2060（平成72）年度には、最大で約530兆円に達する見込みであること。

＊現在、1000兆円を超える財政赤字が、2060年度には、1京1400兆円に膨らむと試算されていること（図1）。

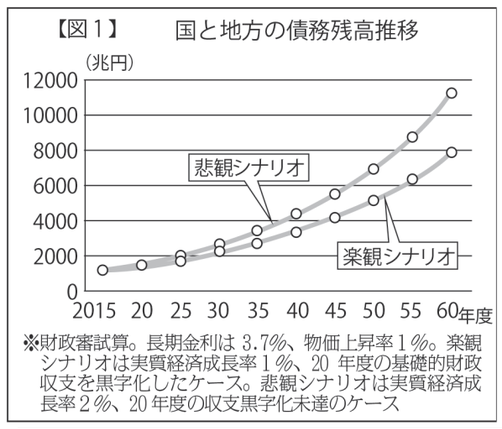
＊財政再建に特別な処方箋はなく、選択肢は歳出削減・社会保障給付費の削減・増税の三つであること。

＊現在の日本の医療がおちいっている構造的な問題は、
① 高齢者の「老化」と「死」は、子孫により良い「いのち」をつなぐ大切な役割であるにもかかわらず、高齢者の死を防ぐことを医療の目的としてしまっていること。
②老化と長年の生活の歪みの「結果」としての病気である多種類の慢性疾患を、
一 人間の生活と慢性疾患の相関関係
二 それぞれの慢性疾患と慢性疾患との相関関係
を診ずに、また、慢性疾患にいたる「経過」を診ずにそれぞれの相関関係を「分断」して、「結果」と「部分」という枠組みの中で、「個別」に一つひとつ「高度な医療機器」を駆使して診断・治療していること（図2）。
③高齢者の多種類の症状に、毒性のあるクスリを中心にして、個別に一つひとつ投薬して対応していること。
にあること（注2）を述べました。

Ⅰ日本の医療と国家財政の現状と問題点

前回、慢性疾患を中心において日本の医療がおかれた現状を述べました。その要点と新たな問題点を列挙してゆきます。

【図1】 国と地方の債務残高推移



※財政審試算。長期金利は3.7%、物価上昇率1%。楽観シナリオは実質経済成長率1%、20年度の基礎的財政収支を黒字化したケース。悲観シナリオは実質経済成長率2%、20年度の収支黒字化未達のケース

＊平成23年度の医療費の総額は38兆5850億円（26年度は42兆3644億円で、9年連続過去最高を更新）政府の推計では団塊の世代（昭和22年～24年の生まれ）が75歳以上となる37年度の給付費は54兆円と予想されること。

図2 健康体と慢性疾患の関係

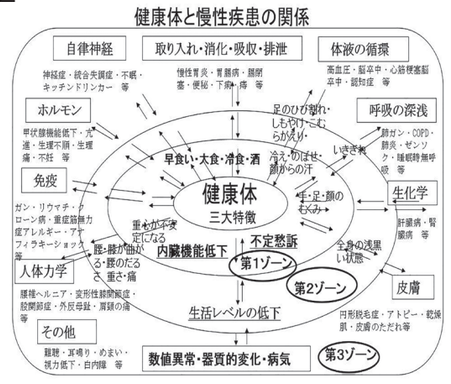


図2 健康体と慢性疾患の関係

ROB医療で介護不安を解決する

平成30年1月12日読売新聞朝刊に次のような人生相談が寄せられました。

「60代女性。長生きするのが怖くて仕方ない。子どもは自分の生活に精いっぱいで、介護はしてくれないだろうし、健康長寿を求めてきた人類が、その求めてきた長生きが達成されると、苦しみだすことになってきたのです。

なんたる矛盾でしょうか。求めてきたものが達成されたとたんに、そのために思い悩むことになってきたのです。

人間とは何か。長生きとはどういうことか。

科学、医学とは？

科学・医学が発展して人間はどうなるのか。大きな疑問が生じました。

平成30年1月13日 たまごビル健康講座

介護不安「長生きが怖い」

Ⅱ日本人は、英国人に比べ、2倍高いクスリを2倍使っている

2012年7月21日のたまごビル健康講座（注3）で、『薬物治療からみたあるべき医療』と題して、浜六郎氏（NPO法人医薬ビジランスセンター理事長・薬のチェックは命のチェック編集長）は、

『日本の総医療費36兆円の約3分の1（約12兆円）を薬剤費が占めている。日本では英国に比較し2倍高い薬を2倍使い、国民一人あたり英国人の4倍の薬剤費を使い、多くの薬害を生みだしている。適切に使用された薬剤によっても、年間100万人が重い害反応にあい、5万人が死亡していると推定されている。これは死因の5位に相当する。間違った使い方、長期的にみた害による被害を加えると、この何倍になるかもしれない（表1・注4）。

薬物治療からみたあるべき医療とは、「薬害に会わない医療」をめざすこと。一人ひとりが薬剤を使わなくてよい健康な体作りをすること。薬剤使用は、最終手段と心得ること。一方、制度として、国が許認可する薬剤の監視を強めること、監視できる人材・組織の育成、それを評価する社会的仕組みを整える必要がある。』

と述べています。

【表1】アメリカでは「薬の副作用」が死亡原因の第4位

順位	死亡原因	年間推定死亡者総数
第1位	心臓病	74万3000人
第2位	がん	53万人
第3位	脳血管障害	15万人
第4位	**薬の副作用**	**10万6000人**
第5位	肺疾患	10万1000人
第6位	不慮の事故	9万1000人

推測統計学によって導き出されたアメリカにおける1994年の死亡原因別の年間推定死亡者数（『岩波講座 現代医学の基礎「薬物動態と薬効」』より引用）

ⅢROB治療とそれにもとづく日常生活処方で「健康体の特徴」＝「上腹部の柔軟度」にやわらかい状態が生まれると、クスリを必要としない「からだ」となる

また、同年10月13日 たまごビル健康講座（注5）で、わたしは、『クスリの副作用にどう対処するか（特に高齢者に対する）』との演題で下記のように述べました。要点を記します。

一 クスリの必要・不必要について

外傷・感染症・先天的疾患・急性疾患・手術などに、クスリは必ず必要。しかし、慢性疾患に対しては、クスリはほとんど不要。逆に害になる場合が多い。

二 高齢者の慢性疾患に対するクスリの問題点は、
①原因と経過を不明のままに、
②「からだ」全体の「はたらき」が低下した高齢者に、
③「からだ」全体と「分断」された「部分」と「結果」としての病状（図2）に、
④つまり、高齢者のいろいろな病状に一つ一つ対処するため、
⑤多数のクスリが投薬されている。
⑥そのため、さらに高齢者の内臓（特に、肝臓・腎臓・胃腸）の「はたらき」に負担が増すため、
⑦さらに、高齢者の「からだ」全体の「はたらき」が低下し、代謝が悪くなりクスリの成分を排出しがたくなる。
⑧そのため、血液中でのクスリの濃度が高くなる
⑨結果として、高齢者のクスリの副作用が大となる。

三 クスリそのものの問題点
①日々いただく食事と比べて、漢方薬でも「はたらき」に偏りがあること。化学薬品は、さらに偏りがあること。
②その「はたらき」の偏りが、効能・効果となる。しかし、効果が得られれば、その時の「からだ」の不調が正されれば、その「はたらき」に偏りがあるゆえに継続して長期にクスリを使うものではない。
③「はたらき」に偏りがあるため、長期に使うと、正常な「からだ」の部分と全体の「はたらき」に異常をきたす。
④具体的に、現代医学的ことばで表現すると、長期の服用は、交感神経緊張状態過剰となり、血流が悪くなる。免疫力が低下する。
⑤また、「はたらき」の偏り＝クスリの毒性の蓄積は、その服用者の「からだ」がもつクスリに対する適応力をこえると、抗がん剤のようにいつ爆発するかもしれない危険性をはらむことになる。

四 高齢者の慢性疾患に対する投薬は、たまごビルでの臨床研究の結果、次ぎのことが分かった。
①偏った「はたらき」のあるクスリの副作用で「健康体の特徴」である「上腹部の柔軟度」がかたくなる。
②そのため、「生きぬく」ために必要な「呼吸・循環・人体力学（姿勢と体の動き）・自律神経（こころの安定と意欲）・内臓全般の動き」が低下する。日々の生活レベルが低下する。
③老化とクスリの副作用による生活レベルの低下との判別が困難なために、高齢者のクスリの副作用を見逃してしまう場合が多くなる。

五 クスリの副作用を予防する方法
ROB治療とそれにもとづく日常生活処方を実行することにより
①「健康体」に近づくと「上腹部の柔軟度」にやわらかい状態が生まれる。そうすると、「呼吸・循環・人体力学（姿勢と体の動き）・自律神経（こころの安定と意欲）・内臓全般の動き」がととのい「生きる力」が生まれ（表2・注6）、クスリを必要としない「からだ」となる。
②すでにクスリを飲まれている方にとっては、「健康体」に近づくと「上腹部の柔軟度」にやわらかい状態が生まれることにより、「呼吸・循環・人体力学（姿勢と体の動き）・自律神経（こころの安定と意欲）・内臓全般の動き」がととのい「生きる力」が生まれ、段階的にクスリを止めることができる。
③どうしても、クスリが必要な病気の方（腎臓移植後の免疫抑制剤など）にとっては、「健康体の特徴」に近づくと「上腹部の柔軟度」にやわらかい状態が生まれ体全体の「はたらき」が高まるために、クスリの副作用を予防できる。

Ⅳ薬剤費は確実に減らすことができる。クスリの副作用は必ず激減する。医師・看護師・医療関係者の技術料は大幅にアップできる

浜六郎氏が指摘されるように、英国人に比べて4倍の薬剤費を使用していることで、約12兆円の薬剤費は、12兆円÷4＝3兆円となります。

しかも、わたし（石垣）が述べたように、現在の病のほとんどを占める慢性疾患については、原則クスリは不要です。

ROB治療とそれにもとづく日常生活処方を実行すると、クスリは、ほとんど不要となります。3兆円は、1兆円になりえます。多くとも、2兆円以下におさまります。2兆円としても、10兆円は省くことができます。しかも、クスリの副作用が、激減することになります。

その分を医師・看護師をはじめとする医療関係者の技術料を上げる資金として活用できます。

松下幸之助氏は、生前「人生は虚構である」と看破されましたが、現在の日本は、その虚構の構造をそのまま維持できる時代ではありません。国家財政がもたないからです。わたしたちも、いつまでも甘い汁を吸うわけにはいきません。ご自分の頸をご自分で絞めていることに気づく必要があります。

【Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ】に述べた論点から、わたしは、四〇億年の「からだ」の「しくみ」を活用した日本人の「生き方」を提案したいと思います。国民一人ひとりがそれぞれ「生き方」を変えるのは、非常にむつかしいことですが、原理は非常に簡単です。

図3 「からだ」の「しくみ」の基本

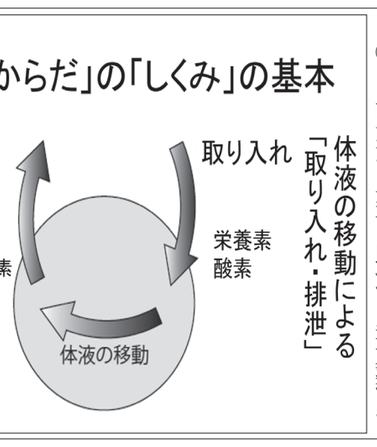
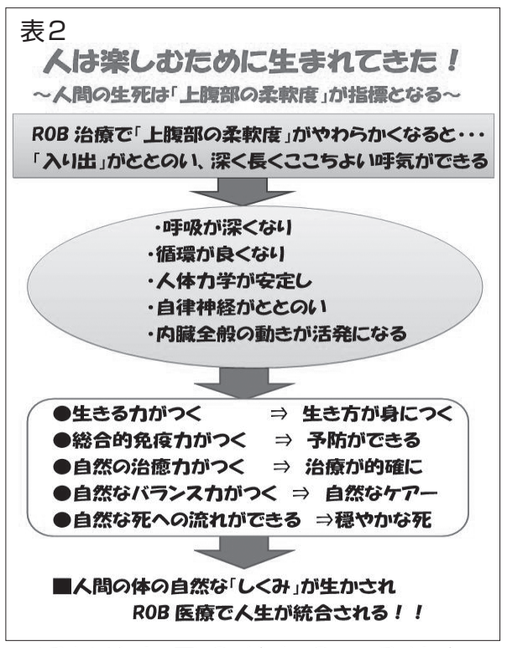


表2 人は楽しむために生まれてきた！
～人間の生死は「上腹部の柔軟度」が指標となる～



注1 『現在の日本医療再生への提言』
現在の日本では慢性疾患の患者主体の予防が必要とされている
＊疾病構造の変化により慢性疾患の予防とケアーが医療の中心に
＊慢性疾患の予防と治療に対応できていない現在の医療とその理由
＊ＥＢＭ根拠にもとづく医療の最も信頼性の高いレベル1の根拠を「ランダム化比較試験」＝疫学的な統計データに何故おかねばならないのか 18年1月1日号参照

注2 『人間中心の枠組みを破り、発想を転換する』①・② 「現代医学」のすばらしさをどう生かすか「現代医学」がおちいっている迷路からどうぬけ出すか
24年1月1日・2月15日号参照

注3 たまごビルホームページ・たまごビル健康講座参照

注4 表1の『アメリカでは「薬の副作用」が死亡原因の第4位』とあるが、薬の副作用で死亡する前に、患者さんに対し、年間30億の薬の処方があり、その薬の副作用で約200万人の入院がある。そして、薬の副作用による死亡が、年間10万6000人ということ。『岩波講座 現代医学の基礎「薬物動態と薬効」』参照

注5 たまごビルホームページ・たまごビル健康講座参照

注6 『「自然の治癒力」を生むＲＯＢ治療』
【Ⅰ生の人間の「こころ」と「からだ」の変化】【Ⅱ生の人間の「こころ」と「からだ」が変化した結果】【Ⅲ「上腹部の柔軟度」と「呼吸・循環・人体力学・自律神経・内臓全般の動き」との関係】24年3月15日号参照